

- 1 対空監視哨ハ常ニ四周ノ上空ヲ監視シ又ハ音響ニ注意シ、若シ飛行機、気球等ヲ発見セバ監視ヲ中絶スルコトナク直チニ状況ヲ指揮官ニ報告スベシ
  - 2 発見シタル飛行機敵ノモノナルカ或ハ疑ワシキモノニシテ我ニ近接シ来ルトキハ直チニ示サレタル防空部隊ニ通報スベシ
  - 3 飛行機全ク我が視界ヲ去ラバ之ヲ指揮官ニ報告スベシ
  - 4 其ノ他概ネ歩哨ノ動作ニ準ス
- 特別守則
- 1 監視哨ノ名称
  - 2 彼我飛行機ノ識別法
  - 3 必要ナル道路、地点ノ名称
  - 4 要スレバ特ニ監視スベキ方向
  - 5 連絡スベキ防空部隊ノ位置
  - 6 報告又ハ通報ノ手段

## 私の軍隊生活（その二）

愛知県 河村 廣康

### 編上靴へんじょうか

編み上げ靴のことを軍隊では「へんじょうか」といいます。編上靴の手入れで春夏秋冬はさほどではありませんが、冬は本当に泣かされます。零下三〇度以下にもなる兵舎の外で手入れをしなければなりません。

ご承知かと思いますが、靴底には滑らないように鉄の鋌が沢山打ち付けてあります。冬ともなりますと鋌と鋌との間に雪と泥が詰まり、それがカンカンに凍ってちつとやそつとではとれません。それを取り除くのに竹を尖らせた「竹へら」で取れということです。しかし竹へらではとても取れるものではありません。そこでナイフでつついて取り除くのです。そこを見つかりますと、「こ

らッ！ 初年兵、貴様たちはこの靴を何だと思っておるのか、畏くも天皇陛下から戴いた大切なものだ。ナイフで革に傷をつけたら天皇陛下に申し訳がたたん。竹へらでやれッ！」というのです。「天皇陛下」と言う者もこの時は不動の姿勢をとらなければなりません。

息を吹きかけたり、こすり合わせたりして手の感覚を甦らせてやるのです。古参兵がいなくなるとナイフでつついて取りますが時間がかかりますし、多少は革底にも傷が付きます。古参兵たちも初年兵のときはナイフを使ったと思い、恨めしくも思ったものです。

泥を取ると今度は保革油を塗るのですがこれは手指で塗らなければなりません。油ですから手入れを終わった後にセッケンでよく洗わなければなりません、そんな暇はありません。いきおい手はアカギレと霜焼けになります。アカギレのところから血を流しながら寒さに震えて手入れをするのです。

#### ヨードチンキ

軍隊というところは擦傷切り傷などは当然ですが、霜焼け・アカギレは勿論、インキン・タムシにも使われていました。霜焼けやアカギレに効くとは思われませんが、医務室に行くと、あの茶色いヨードチンキ（ヨードチンキ）を塗られます。

満州の夏は寒い国だから、さぞや過ごしやすい気候だと思っている方がありましたら、今から訂正して下さい。確かに夏の期間は内地と違って短いのですが、暑さは内地とほとんど変わりません。三五、六度にはなりません。しかし日本と違って湿気がありませんから日陰に入りますと涼しく感じます。けれど暑いことには変わりません。初年兵は教練で絞られくたくたになった体で班に帰ると、班内掃除、もろもろの手入れや使役が待っています。その間に引率されて入浴に行きます。

古参兵たちはのんびりと湯に浸かっています。が、初年兵は殆どですが、自分も一期の検閲が済むまでは厳寒期でも浴槽の中に体を沈めたことは

なかったのです。七分間の入浴時間は取れと言われていましたが、一、二分で浴場から出て直ぐに作業にかからなければならなかったのです。したがって体を洗うのではなく、濡らすだけの入浴です。それから、夏は股間の大事なところが、インキンやタムシにやられます。筆先にたっぷりとヨーチンをつけ、その個所に塗られますと、「うわわーっ！」と飛び上がるほどシミる痛さです。衛生兵が「きさま、それでも帝国軍人か。こんなことぐらい痛くないぞ」と言う。そうでしょう、塗られる方は唸るほど痛い、塗る方は痛くないのは当たり前ですからね。こうして初年兵は軍隊の水に慣れていくのです。

## 続 私的制裁

前に私的制裁を書きましたが、ビンタについては簡単でしたから少し詳しく書いてみます。まずビンタは手ばかりではありません。上靴ビンタ・帯革ビンタ・編上靴ビンタ・銃床ビンタと、よ

くもまあ考え出したと思うくらいビンタの種類がありました。

平手ビンタは頬がヒリヒリするくらいで軽いもの、ほとんどありませんでした。

鉄拳（拳骨）ビンタ「足を開き、歯を喰いしぼれ」と言われるとまずこれです。目から星が飛び散るほど痛かったです。ひどいと口の中が切れ血がでます。数あるビンタの中で一番多くいただきました。

上靴ビンタ、上履きで叩かれるのですが、これが革できていますから、頭がクラクラツとくるほど痛いのです。

帯革ビンタ、これは鉄拳ビンタ・上靴ビンタの上をゆくものです。上着の上に絞める厚い皮でできたバンドで叩かれますが、帯革の端が頬に当たると全身に激しい痛みが走り、頬はたちまち真っ赤に腫れ上がります。

編上靴ビンタ、これはビンタの王様ですね。私は殴られたことはなかったが、気の毒で見えていら

れないほどです。体が横に飛ばされ、頬には靴底の鉄鉾（十三個）でへこみ、大抵口の中が切れ出血します。酷いと歯が折れます。

銃床ビンタ、これはやられた同年兵から聞きましたが、銃の床尾板でゴツゴツとこづかれるそうです。勢いがつくとも額が破れて血がタラタラと流れます。これは酷いと厳禁されました。

対抗ビンタ、初年兵が二列横隊で向かいあい、お互い相手と殴りあうのです。寝食を共にし苦楽も共にしている相手ですから、自然に殴るのに力が入りません。すると監視している古参兵が「コラッ！ きさまたち、お姫様やお嬢様のような殴り方をしやがって、殴ると言うことはこうするんだ」と、そばの初年兵を目の玉が飛び出るほど殴って見せます。そこで自分たちはお互い相手に「すまぬ」と心の中で謝りながら、力いっぱい殴るのです。対抗ビンタは精神的にも残酷なものと思っていました。

とにかく私的制裁といってもこうして鍛えられ

て、一人前の兵隊になってゆくのです。古参兵たちも同じ道を経てきたものですから、苛めを主とした制裁は少なく、早く「やる気」を起こさせようとしてのことですから、相手の体に傷をつけないような気を配っているように自分は思っていました。

実は、自分はたった一度だけ鉄拳制裁をしたことがあります。部隊から九カ月間の通信関係の教育を受けるため派遣され、終了後部隊に帰ってきました。教育を受けているときは厳しい中にもおんびりしたところがありました。自分の隣には初年兵がおり洗濯や掃除などをやってくれ、自分の初年兵のころを懐かしくも思っていました。

班内は、のろまな初年兵に初年兵係上等兵が怒鳴り散らす。召集兵のおっさんがうろろうする。まったく騒々しい。その中で自分より半年後に入ってきた補充兵が上等兵になっていて、怒鳴り、殴るを毎日繰り返し返している。自分の隣の初年兵が殴られている姿を見てから、我慢の緒が切

れ、わざと初年兵や召集兵が多くいる前で「おい、上田上等兵ちよつと来い」と呼び付けました。同じ上等兵でも自分が先任ですから威張ったものです。最初はおとなしい声で「おい上田、お

まえな、ちよつとやり過ぎじゃないのか、見ちゃおれんぞ」といいましたら、「いやあ、このくらいせんと如何んですわ」との返事に、自分は声を荒げ「俺は見るに見かねて言っているんだ生意気言うな」と拳骨で往復ビンタを喰わせました。それから彼はおとなしくなりました。そのただ一度だけ。

### 再び 教練

忘れもしません三月のある夜のこと、日中の疲れでぐつぐつと寝込んでいた午後十一時頃、非常呼集がかかりました。寝入りばなを、ラッパの音とともに「非常呼集！ 非常呼集！」の声に起こされた初年兵の自分は、びっくりして飛び起き、軍服を着て脚絆きゃはんを巻き、外套を着て帯剣をして、

略帽を被り軍靴を履き、鉄兜を背に小銃を持つて舎前に飛び出した。古参兵たちは慣れているから手際よく既に整列している。初年兵係や班長が初年兵の鈍感な行動に怒鳴る。

空砲の小銃弾十五発ずつを支給され、「これから夜間演習をする。終了後、空の薬莖やつきょうは必ず返納するため紛失しないように」と言われ、近くの演習場まで月明かりの雪原を行軍する。ゾクゾクして寒さで体が震え伏せたり、走ったり、匍匐ほふくしたり、その間に空砲を撃つ。東の空が白みがかつたころ演習は終わり帰隊する。寒さと教練にくたくたに疲れた。空薬莖を返納したが、初年兵の一人が「十四発分返納が一発足りない」と、班長が怒り、古参兵はうんざりした顔をする。どうなるかと思った。

他の班は解散となり、第二班はそのまま演習場に引返しました。朝食抜きです。一列横隊に並んで演習場の雪を両手でかき分けながら午前中探しましたが出てきません。寒さと睡眠不足と空腹、

それに疲れが重なりフラフラになって隊に戻りました。やっと昼飯にありつけると思っていましたら、「班長以下全員食事なし」さすが午後の教練はなかったが、初年兵の自分たちは班の仕事や使役に駆り出されて、休むことができなかった。たった一発の空襲菜蕨のためとはいえ、軍律は厳しかった。

## 洗 濯

入隊して一期の検閲が済むまでは、前にも書きましたように初年兵はとにかく忙しいのですから、洗濯などはまともに洗う暇がありません。従って白いジユバン・コシタ・フンドシなどは、黒ずんできやすいのです。とくにフンドシは気を使い、入浴のときにタオルの代わりにしてごまかし、体を洗いながらフンドシも洗ったものでした。

自分たち初年兵の衣服や手箱の整理整頓は特に厳しく、教練に出た後、週番下士官が銃剣術の木

銃で、棚に整頓してある衣服や手箱をひっくり返していきます。そしてなお、敷布が少しでも汚れていると赤いチョークで大きな金魚の絵が書かれています。(金魚が水を飲みたい、つまり汚れているから洗濯せよの意味) こんなときは、もう大変です。ただでさえ忙しいのに余分な仕事が増えます。就寝して、しばらくしてからそと起き出し、敷布をもって洗濯場に行きます。井戸からつるべで水を汲み上げ洗面器に入れて洗うのです。厳寒期の二、三月は鼻水をたらしながら洗うのですが、揉んでいるところ以外の水はたちまち薄氷が張って来ます。

手は冷たさで、ちぎれるように痛み、アカギレの指からは血が噴き出して来ます。一分位するとたまらなくなり、股に濡れた手を挟んで強く揉み暖めます。それを繰り返しながら洗うのですが、やっと洗いは済んでも乾かす所がありませんから、寝台の藁布団と毛布の間に入れて、自分自身の体温で乾かすのです。寝られたものではありません。

せん。物乾場で干したものを盗まれて、員数合わせに泣かされたりで、どうしてこんな苦勞をしなけりやならぬかと、悔しい思いをしたことでしょうか。

### 銃剣術・演習

また、月も出ていない闇夜に銃剣術の試合がありました。防具は着けていますが、どこを突かれるのか見当もつかず危険がともないます。

自分は相手の木銃で胸を突かれたとき、斜め横から突かれたので木銃が防具の下に入り直接胸に当たりました。そのお陰で肺の機能に障害が起きていて、今でも少しの運動で動悸が激しく息苦しくなります。レントゲンを撮ると肺の上部に影が映ります。

夏の演習も大変ですが、満州では何と言っても冬です。厳寒期には前にも書きましたが、零下三〇度、四〇度になります。今で言う民宿での一泊二日の行軍がありました。これだけ寒いと手に軍

手をはめ、その上に冬の軍服の生地で作った手袋てぶくろというものはめませんが、それでも手の感覚は無くなってしまいます。

それで小銃を肩から落す兵もおりました。昼の弁当はハンゴウに入れてあり、「小休止。これより昼食をする」暖めて食うのではありません。立って足踏みしながら食うのですが、その飯たるや、凍っていてアルミの箸でつき起こします。まるで砂利を食うようで、ただでさえ体中が冷え込んでいる上に、氷の粒を胃の中に入れるのです。皆さんご想像下さい。

満人の農家に分宿しました。傑作だったのは便所がありません。「厠かわや（便所）はどこか」と聞くと「無いよ」の返事。ではどうするかと言いますと、「どこでもよい、したいところでせよ」です。歩兵が全装備を体につけますと二七、八キロの目方になります。長く行軍していると疲れが出て三〇、四〇キロにも感じるようになります。歩兵とは読んで字の如く歩く兵隊です。

以前の銃は三八式歩兵銃でしたが、自分たちのときには九九式短小銃で重量は四キロありましたが行軍して夕方頃になると十キロ位にもなりません。

### 射撃訓練

自分は射撃は下手でした。伏せの姿勢で五〇メートル先の標的を狙って撃つのですが、まず当たらなかつたですね。班長から、よく尻の辺りを蹴られました。実弾五発を受け取り照準を合わせ撃つのですが、五発とも標的をかすりもしない。「コラッ！ 射撃の心得をきちんと守らんからだ。寒夜に霜の降りるが如く呼吸を止め、無念無想の気持ちで撃てッ！」と怒鳴られる。

戦車兵になつてから自分は通信手と重機関銃の射手をしていたときのことです。映画などで、戦車が轟音を立て走っているとき砲や機関銃を撃っているのを見たことがあります。実際は戦車が上下左右に揺れますから目標には当たりませ

ん。どこへ弾が飛んで行くのか分からないのです。単発転射とか三発転射の教育を受けますが、機関銃は引き金を引いていると連続に弾が発射します。単発とか三発転射は難しい。弾倉に二十発入っていますが、三発転射の号令に引き金を引くと初めのうちは全弾撃つてしまい、これまたよく叱られました。

夏の日、実弾演習に行つて小休止のとき、標的にキジが飛んできて止まった。すると班長が「よし仕留めてやる」と戦車の中に入り重機関銃で一発で仕留めました。さすが班長だと班全員拍手しました。

### 伝達ゲーム

初年兵は時々、伝達ゲーム（当時は伝令といつていた）をさせられました。「本日我が軍は夜間、敵陣地に向かって切り込み突撃を敢行する」と一列に並んだ初年兵の小声で最初の者に言う。それを次々と伝えて行くのです。最後の者が大きな声

で報告するのです。しかし最初の言葉とは全く違った意味の言葉になっていたり、違う言葉になっていたり、對抗ヒンタということになりません。何回しても、きちんと報告できませんでした。

終戦前夜からシベリアに向かうまで

八月十四日の朝が来ました。定刻時間に「オキロヨオキロ ミナオキロー」の起床ラッパに起こされて、平常どおり補充兵を引率して車庫に着き、もう後はない、明日にも敵はここ近くまで攻めています。せめて小銃の撃ち方をと教え、その日も暮れました。

夕方の点呼のとき「いよいよ明日、迎撃のため出陣することになった。貴様たち基幹要員は夕食後、将校が携帯する（奉天（瀋陽）及び四平街周辺拡大地図）の作成にかかれ。それが終わり次第身辺の整理をせよ。遺書など書いた者は、班長室に届けよ」と通達されたのです。

「とうとう来たな」「明日は十万両の棺桶で、ハイさよならか」「俺が戦死したら、彼女が泣くだろうなあ」「まあ、しょうがないぞ。あしたは口助の戦車を木っ端みじんにしたろうじゃないか」お互い勝手なことを言いながら、地図の作成を終わったのは夜中の十二時を過ぎておりました。

いろいろ教育を受けた帳面・好きな歌や絵のノート・操典などを燃やして、残った物は寄せ書きされた日章旗と千人針。ここが戦場になると果たして遺書を書いても国には届かないと思っただが、先程までガヤガヤしていた室内も静かになり、みんな真剣な顔をして便せんに向かっている。よし自分もと、便せんを広げました。「お父さん、お母さん、先に逝きます不幸を許してください。小さい一代（かずよ）と忍の二人を支えに元気で生きて下さい」と簡単に書きました。長々書くこと未練がましいようで余計辛くなる。気丈な父が悲痛な声で「廣康一、生きて帰ってこい

よー」の聲が胸に響く。門出に見送ってくれた寂しげな母の姿が瞳に浮かび涙ぐみながら、頭の毛を切り爪を切つて白紙に包む。班長に届けてから床に就いたのが午前二時を回っていた。いろんな思ひ出が、走馬灯のように頭の中を駆け巡りなかなか眠ることができなかった。

うとうとして目を開け腕時計を見ると午前五時ごろ、やけに静かだ。気味の悪いほどの静かさだった。

敵が近くに来ているのにどうなっているのだろうと横になつてみると、いつものように起床ラッパに起こされた。朝の点呼には何の話もない。何か気抜けた思いで任務に就きました。午前十時になつて「十二時までには兵舎に戻れ」の伝令が来た。頃合いを見て補充兵を解散させ本部に戻る。

事務所の横を通るとき中を見ると、将校たちが全員不動の姿勢をとつて頭を下げています。その前には白布を敷いた机の上のラジオから声が流れていました。立ち止まつて聞き耳を立てたが、ラ

ジオが古いのかどうか雑音がひどくてよく分からない。そそくさと二階に上がる。皆が「どうなっているんだ」と騒いでいる。

暫くしてから班長が来て「中隊長殿から話があった。十二時から天皇陛下の終戦の詔勅がくだり、戦争は終わった」と告げた。「どちらが勝つたのですか」「まだ分からん。分かり次第知らせてやる」と言つて出て行つた。戦争が終わつたというが、何が何やらさっぱり分からない。「日本は勝つたのだ」「いや天皇陛下が放送されるくらいだから負けたんだ」戦争は終わった。命は助かつたという安堵の思いか、みんなの聲が高い。自分はやはり日本は負けたと思ひました。沖繩をとられ、国土は焼かれ、新型爆弾で広島や長崎がやられた戦況からみれば負けたとしか思えなかつた。

翌日の十六日になつて、「日本は無条件降伏した」とラジオが報じた。その後直ぐに、ラジオは中国語になつてしまいました。血気にはやる若手

の将校たちは「我々だけでもやる」と戦車に乗って偵察に出掛けて行く者もいましたが、負けたと分かって逃亡する者も続出。ことに満州で召集を受けた開拓団の人達で、家族の者が心配で、逃げ出すのも無理はないと思いました。

中隊長たちも生きて恥をさらすよりはと、いろいろ画策したそうですが、部隊長から「貴様たちは天皇陛下のご命令に逆らうのか」と一喝され、偵察から帰った将校たちも部隊長に呼び付けられて、同様に叱られまた諫められて涙を呑んだのです。

自分のように、この満州では身寄りもなく、地理も全く分からない者にとっては上官の言うままに動くより仕方がないのです。小銃には菊のご紋章が彫られています。これをヤスリで削り取って車庫に積み上げました。各種兵器もがらくたのようになら積み上げられたのです。これらの兵器は毎日毎日、手を真っ黒にして汗水流して手入れしたものです。それを思うと癩にさわり、通信機を

二、三台投げ飛ばして壊しました。

戦車は、今まで教練用に使っていたのは四平飛行場で黄色火薬により爆破してしまいました。新しい戦車はソ連軍が自国へ持ち出したのです。

その頃は毎日のように雨が降りました。日本人の流す涙のように……。雨の中を屠所に引かれて行く羊のように、一台、また一台と出て行く戦車を見送り万感胸にせまるを覚えました。ドカーン、ドカーンと飛行場の方から爆発音が聞こえ、黒煙が幾筋も立ち上がる。基幹要員三十六人は班長ともども男泣きしました。

悔しさ、情けなさ、憤りの感情のやり場のなさに、自暴自棄になります。カニ缶・鮭缶などの缶詰類、砂糖・小豆・酒・ウイスキーなどなど、手当たり次第片っ端からトラックで野戦用糧秣倉庫から、どんどん運び出して朝から晩まで飲み食いし通しました。ねじり鉢巻きで酒を飲みながらの博打遊びをする者、なかには、いろいろな物を持ち出してビーやで遊び暮らす者もありまし

た。もう目茶くちやでした。

日本は負けたんだ、捕虜になるくらいなら死んだってかまうものか、一度は死を覚悟した身だというので、捨て鉢になっていたのです。

自分も腹の調子が余りよくなかったのですが、ぜんざいを食ったり、生まれてから一度も口にしたことのない、カニやパイナップル缶など食べどおし、ひどい下痢に悩まされましたが、それにも懲りず食べ続けました。まるで餓鬼地獄に落ちたようでした。遠い故国で父や母が心配しながら待っているのに。まったく浅ましいかぎりでした。

たしか八月二十五日だったと思いますが、ソ連軍に兵舎を明け渡すことになり、隣町の鉄道官舎に移りました。もともと塀と柵がないから二十人、三十人と逃亡する者が増えたのです。自分の中隊の内務係准尉なんかは、トラックに食料や衣類等物資を積み込み、運転台の屋根に軽機関銃を

据え付け、兵隊を二人連れて逃亡したのです。毎夜のようにソ連兵が自動小銃（螺旋状に七十二発の弾丸が装填されていて、自分達はマンドリン小銃と言っていました）のパンパンとけたたましい音が聞こえてきました。ソ連兵の姿は官舎に移ってから初めて見たのです。持ち物検査が二、三回あったが、金目になるような物以外は取り上げなかった。

油断していると満人が夜中に忍び来んできて、毛布や衣服を盗んで行くので嚴重な警戒が必要でした。けれども自分達兵隊は食べることも寝ることも自由で、のんびりとした日々を過ごしておりました。上官も集団生活を送るのに最小限の命令以外は何もやかましく言わなかったからです。

しかし民間の人達は大変だった。女と見るとソ連兵は担いで連れ去る。実際に私も見たことがあります。家財道具は満人が日中堂々と持って行ってしまふと聞きました。南に向かう無蓋貨物列車の荷台は鈴なりの人人人。夜間に家族連れとか、

二、三十人の集団を組んで南を指して逃げていた人達の死体が転々と転がっていました。本当に死に物狂いの逃避行だったと思います。

駅に空の有蓋貨物列車が着き、自分達は糧抹の積み込みをさせられ、その上に、自分で作った大きな袋に衣料をいっぱい詰めて乗り込みました。その後は「私のシベリア抑留記」となります。

### 【編 注】

河村廣康氏の手記(一)は、第XIII巻に掲載されています。

## 私の終戦前後

神奈川県 牛窪 剛

私は大正十四(一九二五)年八月二日、神奈川県、当時高座郡渋谷村下福田にあります真言宗の末寺蓮慶寺にて、父弘善、母ハツの三男として生

まれました。大きな寺に、小学校卒業と同時に修業に出され、夜間中学に通うこととなりました。

中学五年を卒業する時、戦時下の折、即日産自動車に就職が決定されました。当時、室町二番地が日産の本社でした。連日のように職場から応募者を送り出し、現場も事務所も、女性の職場進出が目立って参りました。他に、地方からの女子挺身隊や、東京の大学やら、女学生が動員されました。

朝の工場の入門の際には、憲兵の姿が目立ち社員バッチは必ず着けていました。

輸送課では二十人位がグループを編成し、リュックサックを背負い、神戸や武庫川の東洋ベアリング、富山の不二越鋼材へベアリングを引き取りに何回も通ったものです。一般人は汽車の切符も手にすることは困難な時代ですが、我々には優先的に配慮されておりました。昭和十九(一九四四)年十月頃の車の生産量は一日で一〇台が最高の生産ラインでした。全車が貨物で、軍用車